Ⅰ　令和２年度の運営総括及び来期の課題

１．総括

今年度は昨年度からの新型コロナウイルス感染拡大と緊急事態宣言を受けて、今年度４月 21 日～５月 18 日まで白根北児童館は臨時休館となりました。その間、新しい生活様式に寄り添うべく準備を行い、再び開館後はそれまで以上に新型コロナウイルス対策を念頭に運営方法の改良を行いました。

①来館時の決まり

来館時にはマスクの着用を徹底しました。小学生以上はマスク着用を義務化し、乳幼児は保護者の判断に任せました。但し今年度初めて来館した子どもはマスク着用が身についていない子どもも多いのでマスクを忘れた子どもには１回限り白根北児童館で用意したマスクを提供しました。最近では新しい生活様式のもと、どこに行くにもマスクの着用は習慣づいているように感じられます。

②受付方法の変更

来館したらまず予防効果が高い「石鹸での手洗い」を徹底しました。今までは受付で来館者本人が個人カードを自分で探し入館及び退館ケースに入れ、職員が来館者の把握をしていました。しかし、カードに触れる事でのウイルス感染を回避する事と、日ごとの来館者の情報把握を目的として南区役所健康福祉課から頂いた入館者表のデータをもとに来館者氏名、住所、電話番号、園学校名、来退館時間、体温を記入してもらうよう変更しました。小学生は住所、電話番号を記入するのが難しいので学校名を記入してもらいました。変更したことで大通小学校の生徒は自分の学校名を書けない子どもが多く「おおどおり」の字を学び、書き順を覚えることができ、中高生は自分の住所、保護者の電話番号を覚えることができとても良かったと思います。乳幼児は初来館かどうかの把握が出来なかったり、保護者が「毎回記入する事が面倒で何枚かまとめて貰って家で書いてきても良いですか？」と問い合わせを頂くようになり、登録済みもしくは初来館の〇つけ欄を設け、登録済みの来館者は住所、電話番号を省略できるように簡易的に改良しました。また非接触型の体温計を用意し来館者全員の検温をし、37.5 度以上の発熱があった場合と解熱から 24 時間経過していない場合、家族に風邪症状のある方は来館を控えて頂きました。

③館内の環境整備の変更

３密を回避するため各部屋常時３か所以上の窓、ドアを開け換気しました。机に隣り合わせや向かい合わせに座らないように、座る場所を示す貼紙やマットを置きました。各部屋に「遊んだものいれ」の籠を設置し、遊んだおもちゃは籠に入れてもらいました。籠に入れられたおもちゃは職員が随時回収し、消毒してから元の場所へ戻しました。乳幼児の部屋は遊戯室への移動時等に利用者が居なくなった時に一時閉鎖し、設置されている遊具全てを消毒しました。遊戯室では交代の時間毎に遊具の消毒、換気時間を５分設けました。冷水器も共有を避けコップを持参するか紙コップを提供して水分補給をしてもらいました。子ども達には水筒を持ってくるように呼びかけました。

④遊びの限定

春先は３密の徹底回避により遊びの制限をしました。同じ空間に居ても安全に一人で遊べる遊びとしてぬり絵、間違い探し、絵本の充実(図書館より１００冊借用)や１０ページ程度の白紙のノートが寄付されていたものを利用し、子ども達に「児童館ノート」を提供しました。ノートをもらった子ども達は自分で好きなように絵を描いたり、あみだくじを書いて友達に選んでもらって遊んだり、もし自分たちでまつりが出来たらと企画案を書くなどしてそれぞれ楽しんでいました。

遊戯室でも直接触れない遊びとして様々な競争、輪投げ、手足を決められたところに合わせるアクティビティ、文字探しをして遊びました。外広場も有効活用し、チョーク遊び、縄跳び等をして楽しみました。部屋を移動の際には手洗いを徹底し、物の共有も避けました。

５月 19 日からの再開後新潟県のガイドラインによりボール遊びは制限されていましたが６月 17 日以降解除されたことにより、バドミントン・卓球は１対１、ドッジボールは 10 人までという人数を制限し対応しました。マスクをしたまま遊戯室で過ごしていましたが、暑さと運動が激しくなるとマスク着用も危険になるため、距離を保てる「６人まではマスクを外しても良い」というルールを作り、10 分程度遊んだ後はソーシャルディスタンスを保ちながらその場で５分休み、その後マスク着用し、手洗いをして集会室に戻りました。

子ども達が不満等ないかと思い、子ども会議を実施し「コロナに負けないように気を付けていること・今の児童館の遊びのルールはどうか？」と尋ねると、どちらも活発に意見が出て「コロナだからこのままで良い」と答える子どもが多く、新しい生活様式に順応出来ていると感じました。

乳幼児事業

（１） 総括

春先は来館が見込めませんでしたが、６月頃から０歳児の来館がぽつぽつと増えてきました。「公園で過ごしていたがまだ歩けず、行き場所がなかった」と話される方が多く、ホームページで調べたり、支援センターで紹介されたと話していました。近所の支援センター「マリンキッズ」の職員が BP 講座に参加され、会場の白根北児童館に来館したことにより、支援センターを利用した方に児童館を薦めて下さいました。今年度はそのような南区内の施設職員同士の交流が深くなり、情報提供をお互いに出来たことが大きな発展に感じました。

今年度も南区内だけでなく西区や中央区、秋葉区等、様々な地域から多くの乳幼児親子の来館がありました。特に区外からの初来館の方は、友達の紹介やロコミなどで知ったというケースが多く、区を跨いだ交流を感じました。また、職員が積極的に関わる事で来館者の現状を多く感じ取れました。兄弟と親一人という来館者が多く、土日勤務や転勤などで、夫婦のどちらか一方に育児の負担が偏る「ワンオペ育児」の家族が多いように見受けられます。一人では手に負えない、向き合いたくても向き合えない様な親に職員が他の兄弟と関わったり、見守ったりし、支援が出来たと感じています。

今後はさらに、利用者それぞれの環境にあった関わりが必要だと感じました。

いちごタイム（作って遊ぼう・農園の活動）

毎週火曜日の 10 時 30 分から概ね 20 分程度、乳幼児の定例イベントとして、『いちごタイム』を開催しました。『いちごタイム』は主に入園前の乳幼児親子対象としていますが、夏休みや春休み中は保育園児や幼稚園児の参加もありました。内容は主に手遊び、親子触れ合い遊び、絵本読み聞かせ、季節にちなんだ遊び、リトミック等を提供してきました。参加組数は平均３～

10 組で、月齢は０・２歳児が多かったです。最初は慣れずに活動に参加すること自体が難しかった子でも、回を重ねる毎に徐々に他の友達と一緒に参加することができるようになったり、手遊びができるようになったりと、１年を通して成長を感じることができました。

また、今年度よりいちごタイムの中に新しいイベント『誕生日会』を取り入れました。『誕生日会』では、大きなケーキパネルの装飾をし、誕生月のお友達を皆で一緒にお祝いしました。

その他、農園の活動ではじゃがいもやさつまいもの苗を植えたり、収穫したりして土と親しむ機会を設け、収穫時にはお土産として持ち帰ってもらったりもしました。また今年度から館内に『ほくほくファーム日記』として各作業の様子を展示しました。

① ママのためのハッピータイム（ママハピ）

子育て中の母親に少しでも HAPPY な時間を過ごしてもらおうと４年前から実施した『ママハピ』は好例行事となっておりましたが、今年度は１回の実施となりました。11 月に農園で採れたさつまいものつるを使って「クリスマスリース作り」を行いました。リース作りは毎年実施していますが、リースの形も自分で作り、飾りのパーツも自然素材のものを利用しており、毎年大人気です。今年は定員を例年の半分にし、遊戯室で子ども達を見守りながら作業してもらいました。子ども達も母親たちが見える中でままごとやバギーに乗り思い思いに楽しんでいました。参加された方々は皆活き活きとした表情でリフレッシュしているようでした。普段子育てで忙しい中でも、ほんの一時このように自分だけの時間が持てることでまた新たな気持ちで子どもと向き合えるのではないかと思います。来年度以降も希望を聞きながら開催できればと考えています。

② ちびっこ運動会

毎年家族連れでの参加が多い『ちびっこ運動会』は今年度３密を避けるため、例年の日曜日開催を断念し規模を縮小し、定例の『いちごタイム』に取り入れ行いました。参加年齢は例年では０歳～３歳でしたが、平日開催という事もあり０歳～１歳児が多く、年々未満児から保育園へ入園する方が多いと感じます。かけっこもまだ難しい子どもが多いことから、子どもを段ボールバスに乗せ母親が引っ張るレースやバギーに籠を付けお買い物レースをし、最後に玉入れをしました。どれも親子で楽しめる遊び感覚のレースにしました。最後に一人一人にメダルを授与すると、子どもたちは嬉しそうな表情を見せていました。今年は、日曜日から平日開催にしたことにより、家族で参加出来ない方が多かったですが、家族のために我が子の写真や動画を撮影していました。長岡市から参加された方や祖母と参加された方もおり、今後も『ちびっこ運動会』の必要性を感じました。

③ 親子リトミック

いちごタイムに参加する利用者から「リトミックを定期的にやってほしい」という声があがり、リトミックの資格を持つ職員が１歳児親子を対象に月１回全６回コースで『おやこリトミック』を実施しました。リズム活動を中心に工作や季節に合った音楽に触れ合う体験ができ、初めは一緒に行動の出来ない１歳児が回を重ねるごとに母親と一緒にリズムに合わせて歩いたり、止まったり、手をたたいたりと身体を使って表現が出きるようになっていました。工作も母親に手伝ってもらいながら紙を破ったり、クレヨンで色を塗ったりと色々な体験をしながら個性的な作品がいくつも出来ました。音楽に合わせた賑やかな時間と絵本読み聞かせの静かな時間の区切りが出来てきている子ども達が多く、回を重ねる中で成長を感じ取れました。また母親達も毎回同じメンバーなのでコミュニケーションを取り、仲良くなっ

ていく姿が見られました。平日開催だった為、次年度から保育園に入園する子が多く３月で終了しましたが、参加者の要望を聞き次年度は土曜日開催で、兄弟も交えて参加できるように行う予定です。

今後も利用者からの声を大切に利用者にあったイベントを行っていきたいと思います。

④ にゃんこの手（オーエンジャー☆みなみ）

子育てオーエンジャー☆みなみは子育て中の母親に研修を受けたスタッフがお茶やハンドトリートメントなどを提供しながら育児中の母親の悩みをサポートするボランティア団体です。白根北児童館が位置する北部では『にゃんこの手』と命名し、５年前から児童館でも活動を始めました。家に閉じこもりがちな親子から気軽に参加してもらい、オーエンジャーや参加者同士で子育ての悩みや相談を聴くことを目的に実施しました。内容は昨年度まではお茶やお菓子を出しながらハンドトリートメントやスイーツデコ等を提供しておりましたが、今年度はコロナ禍において、ハンドトリートメントや物の共有を避けるため工作は中止しました。

そんな中で出きる事はないかと考え、今年度異動してきた職員とオーエンジャースタッフのユニット『Peek-a-Boo♪』のクリスマスコンサートを開催しました。コンサートを目的に多くの申し込みがあり、親子が笑顔で楽しむ様子が印象的でした。１月には子育てマイスターの資格を持つオーエンジャースタッフから『自己肯定感を育むおはなし』をして頂きました。幼少期の甘えと甘やかしの違いを聞き、母親達は実際の我が子の行動が甘えか？甘やかしか？と子どもに対する接し方を相談していました。

普段から児童館を利用している母親も、オーエンジャースタッフと話している様子を見ていると、母親たちは話せば話すほど子育ての疑問や不安があると気づき、普段の職員と違う目線の人との交流の必要性を強く感じた場面でした。

⑤　移動児童館・園外保育・年長児交流会

移動児童館では、大鷲保育園、大通保育園にカプラの提供を行っていました。今年度はコロナ禍により、移動児童館の申し込みはありませんでした。

職員自身も園に出向く危険性を考慮し、もう少しコロナ禍の状況を把握でき、安全性が見込めてから活動できたらと思います。

園外保育では、今年度は市内の保育園が遠足として利用してくれました。諏訪木保育園とカトリック幼稚園は 10 月に、根岸保育園は 11 月に園外保育で利用しました。遠足の目的地が当初の予定と変更され、少しでも園児たちが楽しめたらと今年は 10 月に利用した園に、ハロウィンパーティーで使用するブースや、ハロウィン工作を提供しました。園でも学年ごとに日を分けて来館し、こちらでも部屋を分けて入れ替え制にし、人数を減らし３密も回避しました。11 月に利用した園は、カプラの提供を希望されたため、遊戯室で職員が園児にカプラの使い方や遊び方を教え、一緒に楽しみました。その後、白根カトリック幼稚園は改築中という事もあり何度か園外保育に利用しました。３月の暖かくなってきた頃に大通保育園の未満児らが散歩がてら利用したり、年長児の最後のお楽しみに児童館を利用していました。年長児には「卒園前のお楽しみ」という園側の思いを汲んで遊戯室に祭りで使用する遊びのブースを提供したり、今年大流行した「鬼滅の刃」のキャラクターを使った遊びを作り提供しました。子ども達はとても喜び、その後親子での来館が増えました。「一年生になったら一人で来る」と張り切っている子ども達の笑顔はとてもまぶしく見えました。

季節イベント

定例の乳幼児イベントの他に季節に合ったイベントも実施しました。春はじゃがいもの苗植え体験、７月七夕会、９月縁日ごっこ、10 月ハロウィン、12 月クリスマス会、２月豆まき会、３月ひなまつり会と、それぞれの季節を感じながら、月齢の低い乳幼児でも無理なく参加できるイベントを実施しました。内容のひとつとして、職員が寸劇をして母親達にも見て楽しんでもらえる取り組みも提供しました。近年母親達の中で、我が子を写真に収めたいという方が増えていることや、０歳児はそもそも手遊びやゲームに参加することが難しいことなどの理由で、「写真スポット」を設けました。各イベントで「写真スポット」や「お昼寝アート」などのブースを設けるととても人気で、１人から友達同士、母親と一緒になど様々な写真撮影を楽しんでいました。特にハロウィンでは仮装をしてくる子どもが多く、華やかに着飾った衣装でそれぞれ楽しんでいました。今後も、その都度利用者の声を聞きながらイベントの内容を柔軟に変えていきたいと思います。

（２）来期の目標・課題

①児童館 PR 活動の強化

初めて利用された方の話を伺うと、児童館の存在は知っていても「０歳～18 歳までの子どもが利用できる」ということは知らなかったという方が大半です。まだまだ児童館の認知度は低く、今後も根気強く PR 活動を行っていく必要があります。まずは利用された方との関わりを大切にして、また遊びに来たいと思ってもらえるような雰囲気作りを心がけます。そこから紹介や口コミで広がることが理想です。また、移動児童館として積極的に地域に出向き、児童館を知ってもらう機会を多く作りたいです。そもそも「移動児童館」の仕組みを理解していない保育園もあるので、まずはそこの周知から始めたいと思います。保育園だけでなく、地域の祭りやコミュニティ協議会主催のベビーマッサージ等にも参加して幅広く PR ができればと思います。

② 保育園同士の交流

今年度は昨年度の移動児童館や園外保育等で各保育園との関わりを持てたことにより、園の先生方との繋がりを感じられました。また、平日の夕方には保育園帰りの園児たちの利用も多くありました。コロナ禍の状況によりますが、来年度は児童館を拠点として保育園同士の交流会ができればと考えています。特にガデリュス・いぶき保育園と大通保育園の園児たちは、卒園後同じ小学校に入学する子が多いことから年長児を対象に企画できればと思います。保育園時代に児童館で遊んだ経験をその後も小学校、中学校、高校と繋げていくことで子どもたちの中で定着していくと思います。まずは、各保育園と密に連携をとって、イベントの内容や時期等を検討していきたいです。

２．小学生事業

（１）総括

今年度の小学生の延利用者数は3,210 名と 2012 年の開館からの年間利用人数を調べると過去最低の人数でした。例年来館者カテゴリーの中で一番多い利用者数となりますが、小学生は５月の緊急事態宣言解除後も分散登校が続き、不要不急の外出を控える行動から徐々に公園で過ごす子どもが多く、児童館を利用するようになったのは暑くなってきた７月頃からでした。ま

た夏休みも 20 日程度の期間に絞られたことなどが影響していると思います。特に小学１年生は春からコロナ禍の影響を受け、児童館に親と足を運ぶことができず、利用せずに過ごしたことから児童館を知らない子どもが多かったです。徐々に子ども達の利用が戻ってきても、長時間の滞在を避け１時間程度で他の遊び場を求めて移動する子どもが多かったように感じられます。

① わくわくタイム

毎週水曜日の 16 時 30 分から 30 分間、小学生を対象に遊戯室で体を動かす遊びやレクリエーションを行いました。今年度春頃は外遊びを中心に文字探し、チョーク遊び等の一人で遊べる内容の遊びをし、６月頃から遊戯室でドッジボール、ドンジャンケン、鬼ごっこ等皆で一緒に遊ぶ遊びが出来るようになりました。密を避けるため遊びの内容に合わせて定員を設け、定員より参加希望者が多い場合は２部制に分けて遊びました。わくわくタイムは異学年での交流を目的に行っていますが、今年度は大通小学校でも縦割りの活動が中止され、他学年の児童を知らない子どもが多く、職員が子ども同士の関わりを繋ぐことが多く見られました。10 月から３月までは、小学生の退館時間が 17 時になることから開始の時間を 30 分繰り上げて実施しました。冬季期間は、来館者数自体が少ないですが、わくわくタイムを目がけて来館してくれる子もいました。小学生の中には、まだまだ異学年同士で遊ぶことが苦手でイベントに参加しないという子もいるので、今後さらに内容を検討していく必要があります。

② おりがみ Days

今年度コロナ禍で遊びが制限された事や今の児童館を利用する子ども達の様子を見て、子ども達が興味を引くキャラクター「鬼滅の刃」の折り紙を提供する新しいイベント『おりがみ Days』を実施しました。近年児童館を利用する子ども達は一人で来館し、一人遊びが出来ず、職員が色々と遊びを提供したり他の児童と繋げても、職員が他の利用者対応の為席を立つとその遊びをやめて職員に駆け寄ったりと一人で過ごせない子どもや、遊んでも５分と同じ遊びが出来ない子どもが多く感じられました。そこでキャラクターおりがみを約 40 分集中して折ることで集中力の向上、職員と共に作業をする安心感、細かい作業の慣れ、上達を目的として、６月から１ヶ月毎にキャラクターを変え、毎週火曜日の 16 時から１回３名で行いました。６月は一番難易度の低い「我妻善逸」からスタートし、10 月には映画公開に合わせて「煉獄杏寿郎」などキャラクターを難易度順に提供しました。また、長期休みには火曜日に参加出来なかった子どもに合わせて『おりがみ Days リターンズ』を実施しました。参加した子ども達は職員の折り方を真剣に聴く子ども、先走り違う所をハサミで切ってしまう子ども等様々でしたが、職員が丁寧に教え、間違った子どもも個性的なキャラクターとして認める声掛けをしたことにより、子ども達は自信満々に他の職員に完成した折り紙を見せていました。毎回参加する子どもからは手先の上達、一人で集中して遊ぶ、順番を守る等の変化が見られました。

『おりがみ Days』は運営協議会でも評価を頂き、地域の方からおりがみの寄付や大郷地域生活センターから来年度の移動児童館の依頼を受けました。

③ メーンイベント

今年度はコロナウイルスの感染状況と感染症対策を行いながらのイベント実施方法が徐々に考えられてきた頃からスタートしました。２月に豆まき会、３月にはるまつりを実施しました。２月の「豆まき会」では時間を２部制にして１部「小学生と乳幼児の兄弟」、２部「乳幼児親子」で対象を限定しました。毎年恒例の職員扮するリアルな鬼の登場と、今年は無病息災の妖怪ア

マビエの登場で子ども達は笑いと恐怖に包まれていました。各自新聞紙で作った豆を真剣に投げる子ども達の様子を見て、早くコロナ禍が収束する事を願うばかりでした。

３月の「はるまつり」では、完全予約制の３部制にして１回 30 人程度に限定しました。会場も入口と出口を分けた他、遊戯室のみで遊びのブースも数を減らし、ボランティアも最小限で行えるようにしました。しかしボランティアの方は皆さん「待ってました」と言わんばかりに参加してくださり、総勢 17 名のボランティアの方が協力して下さいました。皆さん地域の子ども達の為に協力をしてくださる思いに感動しました。参加した方からのアンケートでも「コロナ禍でイベントを企画して頂きありがとうございます」という言葉を多くいただきました。初めての対応で課題も多くありましたが、出来る方法を探りながら実施していきたいと思います。

④　工作コンテスト

毎年月に１回『作ってあそぼう』を実施していましたが、物の共有を避けるため、今年は実施しませんでした。そんな中で何か出来ないかと職員から声が上がり、シルバーウィークに空き箱等を使って自由に工作をしてもらう『工作コンテスト』を実施しました。会場を遊戯室にし、のりやハサミ等の道具は個々に準備、材料を並べた所から決まったものだけ取りに行く形で、共有を避けました。子ども達は思い思いに好きな作品を作り、題名も考えてもらいました。審査員はその日来館していた中学生や保護者にお願いし、気に入った作品に１票入れてもらいました。

作品はその後大通地域センターで行われた作品展に出品し、児童館と地域の繋がりを子ども達にも知ってもらう事もできました。子ども達はコンテストで良い評価をされる喜びや、地域の方に作品を見てもらい自信につながったのではないかと思います。

⑤ 地域住民によるイベント

今年度も、地域のボランティア方からイベントを提供していただきました。１人は、地球温暖化防止推進委員の方で、「地球わくわくデー」と称し、小学生に温暖化による地球の影響の話や環境かるた、環境マーク探し等を提供してもらいました。子ども達には少し難しい話でしたが、環境マークは「見たことある」「〇〇についている」等興味を持っている子どももいました。また以前活動していらっしゃった地域ボランティアの方からマスクを作成して頂きました。「職員が皆でおそろいのマスクをしてイベントをしていると素敵だと思って」とクリスマス柄と鬼滅の刃柄のマスクを頂きました。「児童館は子どもにとって、とても大切な場所。私達地域の人が支えて活性化させないと！」と仰っており、早速。クリスマスシーズンやクリスマス会、おりがみ Days で職員全員が着用する等して使用しています。

（２）来期の課題・目標

児童館が開館し９年目を迎え、子どもたちの中でも遊びやイベントが定着してきました。特にメーンのイベントでは、普段来ない子どもたちの参加も多く、改めて児童館で行われるイベントを楽しみにしている子どもが多いことを実感しています。また、今年度は感染対策の観点から、みんなで行うイベントが難しく個々で遊べるイベントを行ったことにより、１～６年生全員が満足する内容を提供する事が出来ました。ただ、子ども達にとって人との関わりがとても大切な時期であるため、皆一緒に行うイベントが出来たら良いと考えています。高学年になるとイベントに参加するというよりも普段の友達同士の遊びを目的に来館する子も多く、イベント時にボランティアや下級生のお世話係を頼むと喜んでやってくれる子もいます。そこで、来年度は主に低学年はイベントに参加する主体となり、高学年はイベントを企画・運営する主

体となるように２つの角度から子どもたちがイベントに携われればと考えています。下級生は上級生の姿を見て学ぶ部分も多く、そこから生まれた関係性は普段の学校生活にも反映していきます。共にイベントを作り上げる楽しさや喜び、達成感などを味わい、今後の生活に繋げていければと思います。

３．中学生・高校生事業

（１）総括

中高生の年間利用時期は暖かい時期が多く、部活動の休みの日や週末にグループ毎で来館していました。春先には高校の休校や部活動停止により中高生が 10 人以上のグループで行き場をなくし来館していました。中学生は公園や今年新しくオープンした「ウオロク」のフードコート等で友達同士過ごしていると中学校にクレームが入ると聞きました。児童館ではそのような事はなく、３オン３コートでバスケットボールをしたり遊戯室でバドミントンや卓球を楽しんだりする姿が多く安心して過ごせる場だったのではないかと思います。

体育祭前には３年生の１クラスが児童館に集合し、大縄跳びの練習をしていました。今年の体育祭は観戦者人数も限定され、職員は観戦に行くことができませんでしたが、体育祭前日には子ども達から依頼を受け、応援グッズに職員が応援メッセージを書きました。体育祭後には「優勝した！」と報告に来てくれました。その後も６人程度の人数で毎日学校帰りに遊びに来ていました。受験シーズンになると来館が一時無くなりましたが、卒業後、受験後、合格発表後にはまた皆で集まり、カードゲームやバドミントン、バスケットボールと楽しんでいました。卒業後も中学校の水色の体操着で集合し、とても微笑ましくありました。

大雪に見舞われた今年の冬は、来館が見込まれませんでしたが、30 分かけて歩いて来館したグループもいました。宿題をしたり、自分たちで遊びを考えソフトバレーボールを楽しんでいました。その後、子ども達に意見を聞くと「バレーボールのネットが欲しい、学校や公民館で余ってないかな？寄付してもらえないかな？」等とアイデアが次々上がり、バドミントンの支柱に紐を通した畑のネットを取り付け、簡易ネットを職員と作りました。暖かくなり雪が解け始めた頃「３オン３コートが使えないか」と職員に尋ね、「あの雪山が解けたら使えるよ」と話すと「僕達で崩します」と言って全員で雪山を崩す作業を手伝ってくれました。またはるまつりの準備や職員がお願いすると何でも手伝ってくれ頼もしい限りでした。

また一人で来館し、職員室付近で職員と近況や進路について話をしたり、カウンターでぬり絵をしたり、職員とバドミントンをしたりと、職員と過ごすことを目的として来館する生徒も数人いました。

イベントでは、普段忙しくて来館自体が難しい中高生の現状を考慮して、日にちを指定するのではなく月間や週間で行いました。期間が長い分、平日から休日までより多くの中高生がイベントに参加することができました。

『チャレンジミッション月間』では職員と遊びで勝負するというイベントも開催しました。オセロ、マンカラ、ウノの中から子どもたちが遊びを決めて職員に勝負を挑むというものです。単純ですが、職員と子どもが関われるきっかけにもなり、勝負の後にも会話が生まれ距離を縮める事ができました。『ハロウィン週間』では『ハロウィンミッション』として、廊下に貼られた文字を組み合わせてハロウィンに因んだ文字探しをしました。10 文字程度の文字が廊下の壁面等に貼られ「ハロウィン」の文字が見つかると思ったら「ン」が見当たらず、正解は「ほうき」等、中高生でも正解できるまで少し時間がかかるように設定しました。その他、仮装をし

たり、職員の誰かに「トリック　オア　トリート」と声掛けし、「ハッピーハロウィン」と答える職員を探したりして話した事のない職員にも自主的に声掛けをしていました。イベントを通して普段話をしない子ども達とも関係性を作り、今後も、中高生にとって居心地のよい『居場所』となるようにイベントや普段の関わりを大切にしていきたいと思います。

（２）来期の課題・目標

中学生・高校生の『居場所』作り

中高生の年代になると、学校の授業や部活動、習い事等でそもそも児童館に足を運ぶこと自体が難しくなります。忙しさに加えて人間関係や進路のことなど悩みが多くなる時期に、児童館が息抜きするための１つの『居場所』になればと考えています。今年度の中学生３学年はどの学年も小学生の時から来館していた子ども達で、小学生の頃に遊びのルールや態度等で職員とぶつかり合った子ども達でした。一時来館しなくなっていた子ども達が再度来館し、成長した姿を職員に気付いてもらい、職員と沢山話をして交流している姿をみると、彼らにとって安心できる職員がいる自分の『居場所』の一つとして感じ取ってもらえているのだと思います。また中学生になるとまだ児童館の存在を知らない、知っているけど行ったことない子ども達と一緒に来館し新たな利用者も増えています。

中高生の来館は、小学生時代の関わり、更には乳幼児時代の関わりが反映されると感じました。来館した時には職員が密に関わり、信頼関係を築くと同時に中学校等にポスターを掲示して周知していきたいです。イベントの内容もスポーツ系に加え、職員とのおしゃべりタイムや受験時期の学習応援タイム等を設けてゆっくり話したり、勉強の息抜きをしたりするものを提供できればと思います。日々の忙しさなどからストレスフルな環境で過ごしている中高生の心の拠り所となるように『居場所』作りをしていきたいです。